

「ルビンの図形」に寄せて

もうだいぶ前ですが、『吃コミ』(NO. 38 92. 6. 4)にルビンの図形が載っていて、その説明が載っています。ちょっと長くなりますが、引用します。

私どもはどう人間理解するのか、整理をしてみたいと思います。ひとつの価値観、あるいは生き方だと思うのですが、お聞きいただいて、ご自分なりの価値観、生き方、人生観、人の見方を育てていっていただきたいと思います。

この図形をご覧下さい。何に見えますか。

「2つの顔が向かい合っている」と見る人もいらっしやいますし、「盃」と見る人もいらっしやいます。「2つの顔」という部分を見立てているときは、それが<図>です。この<図>のことをゲシュタルト・セラピーにおいては意識の全面に出ているものと言います。

「2つの顔」を意識するためには一方において「盃」の部分は背景になって見えていません。これを<地>と言います。実はこの<地>があるからこそ「2つの顔」浮き出て、意識されるのです。反対に「盃」の部分が意識されるときには、「盃」が<図>になって、「2つの顔」は背景の<地>になります。これがルーマニアの心理学者、ルビンが考えた『ルビンの盃』として知られているものです。・・・・・・・・



引用した文でも、この話から図と地の反転の話が出て来ます。「盃」の部分が<図>として浮かびあがるときには、「2つの顔」の部分が<地>となりしりぞき、逆に「2つの顔」の部分が<図>として浮かびあがるときには、「盃」の部分が<地>としてしりぞくという主旨の話です。

最近、『子どもたちが語る登校拒否』という本を読んでいて、この反転ということにぴったりあてはまる話を見いだしました。

Ha ha ha… ふざけた事言ってやがるぜ“学校に合わない子供が増えている”子供に合わない学校が増えているという事にまだ気がつかねえのか？

学校の先生は、「勇気を出して学校に来るんだ。いじめられてるけど一生懸命来ている生徒もいるんだぞ」などと言う。

「勇気を出して学校へ来い」 だあ？

「学校とは勇気を出さなきゃ行けないようなとこなのか？」

文部省でさえ、従来の（登校拒否は）「家庭での育て方がまちがっているために起こっている、特別な子どもの問題」という考え方から、「学校に心の居場所がないために、どの子にも起こり得る現象」というとらえ方によって変わって来ています。偏差値の輪切り教育の中で、学校が死にかけている、その中で、「生きよう」とする子供達が飛び出して来ている、それが「登校拒否」ではないのでしょうか？

そのような「反転」のとらえ方は、吃音者問題でもできます。

吃音の負性を、武満徹はその「吃音宣言」という文の中で、見事に反転させています。「吃音者宣言」の中で、「どもりは悪いもの、劣ったもの」という社会的意識を問題にしていますが、そのような意識が凡通的にある社会こそが「悪いもの」というとらえ方はできないのでしょうか？吃音の矯正に熱心な吃音者が、海外青年協力隊員としてかつて南洋の島に滞在しました。その島に吃音者問題はあるのかという私の問いかけに、彼は「あるはずがない」と断言しました。『みんなが手話で話した島』の話—聴障者がかなりいて、みんなが手話を覚え、みんなが聞こえないことをとりたてて意識しなかった島の話もあります。そもそも吃音が<図>として浮かびあがる構造ということが問題になるのではないのでしょうか？

このようなことを書くと、「軽度の障害の場合には当てはまるけれど、重度の障害者の場合はどうなのか、重度の障害者の問題から規定されて、軽度の障害者の問題があるのだ、重度の障害者はいつでも差別されてきた。それは自然のことなのだ。」という論理が出て来ます。

では、例えば、「食事—排便に介助を必要とする障害者」の問題について言及しておきます。最近、私は自分自身の言葉の表現に厳密になり、他者の文に対しても、一つの表現から問題を言及していくために、よく「揚げ足取り」という批判を受けるのですが、一つの言葉—表現の中にその人の障害者観—世界観が示されています。先ほどの「食事—排便に介助を必要とする障害者」について言えば、一般的に言われる「食事—排便が一人でできない障害者」という言い方をすれば、そこに明らかに負の価値性を表現する言い方になっています。そして、例えば、この同じ人を「車椅子使用者の立場でみんなが生きやすい街づくりを提言できる人」というとらえ方をすると、そこには「反転」が起きています。

さて、「食事—排便に介助を必要とする障害者」という言い方をあたかも、何らの価値判断を持たないように言いましたが、このことがすでに負の価値付帯的です。ルビンの図形は二義図形ですが、ここから援用して、図として浮かびあがる‘異化’の問題として指摘できます。「食事—排便に介助を必要とする」ということが異化しているのです。

そんなことが、異化するのとは当然だと主張が出て来そうです。では、たとえば、近代人

は、自分が食べるものを自分で作っていません、自分で採るといふこともしていません。自分で作れと言われて何人できるでしょうか？そこでの「できない」といふことは問題になりません。たとえば、最近、「男の自立」といふことで問題になってきていますが、男が家事をできないことは、近年永く問題になりませんでしたし、今もまだ、その傾向があります。

どのような「できない」ことが問題になり（異化し）、どのような「できない」ことが問題にならないのか（異化しないのか）、そもそも「できる」－「できない」といふことがなぜ問題になるのか？

先程の問題で言えば、「食事－排便は自分でやるものだ」といふ標準的人間像が孕まれているのです。では、何故そのような標準的人間像が生まれたのか？

自分のいままでの価値観－常識を疑ってみる、逆になぜそのような考え方ができたかを考えてみる。ルビンの図形はそのようなことを私達に教えてくれます。

念の為に書き置きますが、私は現在の「宣言」推進者のように、気持ちの持ち方を変えようといふことを主張しているわけではありません。その価値観－世界観は、その社会の在り方と切り離せません。自分だけ気持ちの持ち方を変えても、変えようとしても、日常的な吃音への非難の中で挫折せざるを得ません。武満徹の「吃音宣言」も何らかのインパクトはあっても、そんなことを言っても、現実に吃音が非難され、吃音者がなんらかの排除を受ける社会において、どういう意味をもち得るのだといふ反論に応えることはできていません。社会的意識だけを取り出して、啓蒙運動をしても、社会構造と社会意識は切っても切り離せませんから、これも挫折します。社会そのものの変革抜きには、障害者への差別はなくなりはしないのです。

冒頭のルビンの図形に関する演繹は、既製の価値観を疑ってみるという事を提起していますが、もっと根源的に、そもそも「図」として浮かびあがっていること自体から、その浮かびあがる構造自体をとらえ返す必要があるのではないのでしょうか

杉本博幸（東京）

（「全言連への対話」シリーズ 『吃コミ』への投稿）